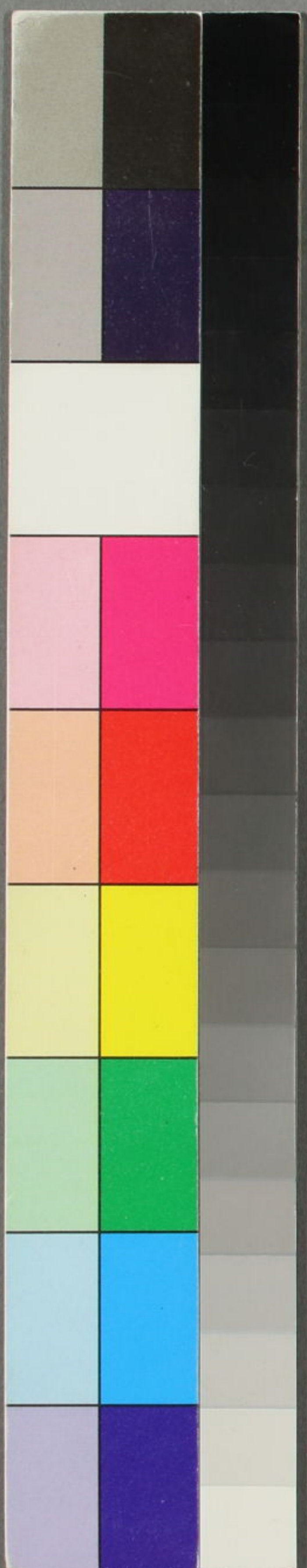


近代
世事
談
二



本朝世事談綺卷之二目錄

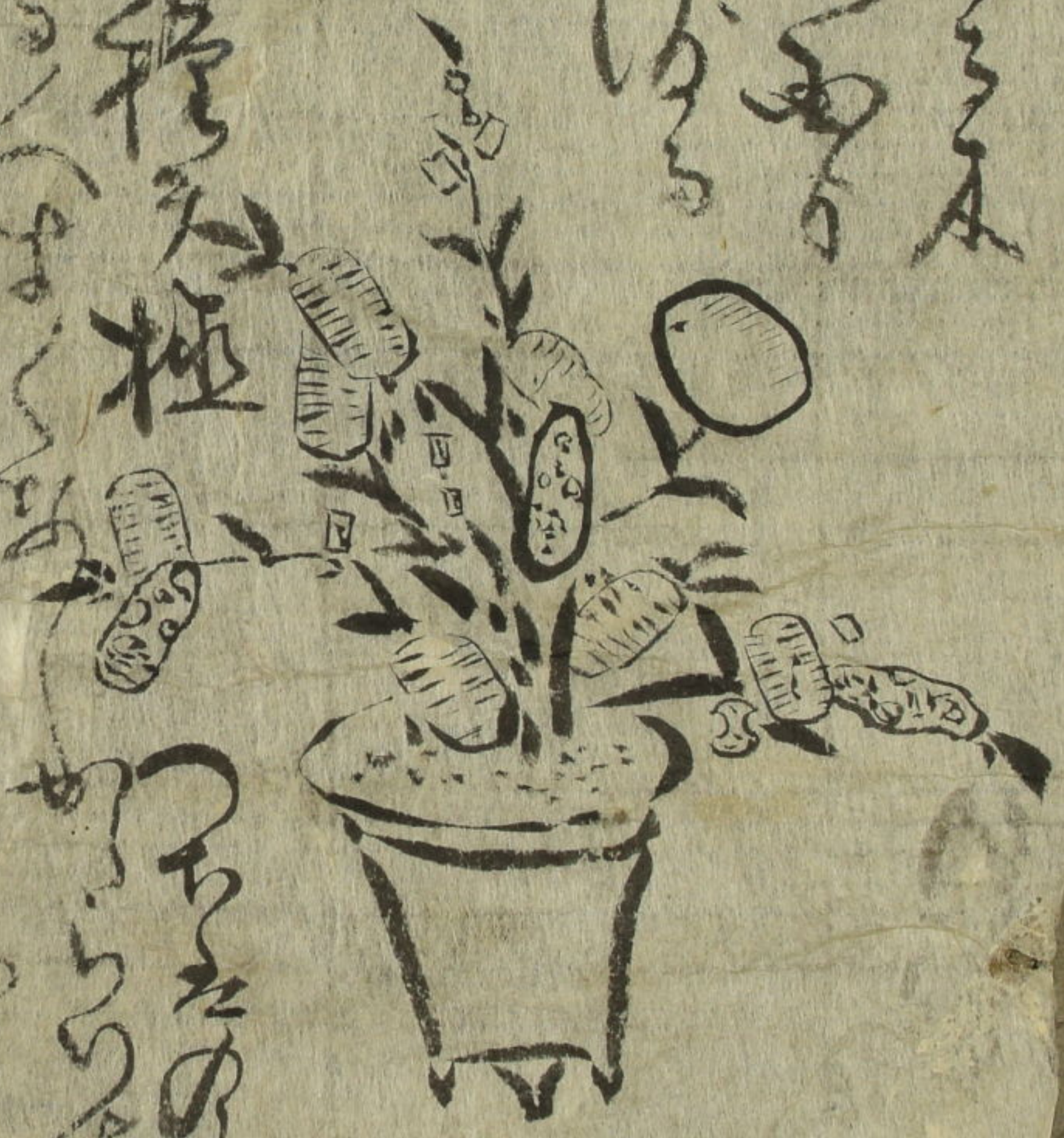
○生植門

胡	緒	佛	東	賴	耳	玉	西
鬼	手	采	蒲	桐	諸	蜀	心
子	卷	花	塞	幸	牛	花	
箱	松	春	朝	秋	搥	番	南
根	榮	草	朝	海	搥	叔	心
草			朝	棠			
伊	落	美	鐵	千	臘	藕	蜀
波	化	人	線	日	梅	豆	黍
奈	生	蕉	花	紅			
之							

梅のつぼみ

あけぼの極

あけぼの極



時
計
草

用
門

尺八 膳 瀬戸物 井戸茶盆 乾山焼 阿弥陀堂歌 隠元藥罐

鐵管 鐵鎗 炮 銅 油 拿 爲 扶 伽 羅 油 水 列 炮 孟 藥 物 猪 牙 舟

江戸辻駕

唐弓

加留多

本朝世事談綺卷之二

菊岡沾原述



生植

○西心

寛永^{けいゑい}永^{えい}年^{ねん}中^{ちゆう}・琉球^{りゅうきゅう}より薩摩^{さつま}へくる慶安^{けいあん}の頃^{ころ}に
 長崎^{ながさき}より僧^{そう}義堂^{ぎどう}乃^の室^{むろ}花集^{けあつ}の和^わ西^{さい}心^{しん}詩^しあり
 西^{さい}心^{しん}今^{いま}見^み生^{なま}東^{とう}海^{かい} 剖^{はら}破^ぱ金^{きん}玉^{ぎよく}露^ろ濃^{のう}
 義堂^{ぎどう}ハ寛永^{けいゑい}のころの人なり・義堂^{ぎどう}手^て中^{ちゆう}藤堂^{とうどう}家の
 呉^ご鑑^{かん}茶^{ちや}菱^{りやう}倉^{そう}某^{ある}長崎^{ながさき}よりけ種^{くさね}を採^とめ・辨^{はん}別^{べつ}津^つの至^{いた}り
 大^{だい}寺^じにゆ^く則^{すなはち}其^{その}妻^{つま}の弟^{てい}宅^{たく}に堂^{どう}とてむとあり

如穀を食ふに其諸を食ふよりありて憂
 と切根を根生て活きて土人朝夕飯に充てりて憂
 粉にて焦る民食を暇を暇を暇其利大
 なる肥前産る多し樹を東氏へ來て酒類なり

○ 搗 搗

實永のころ蜜國より渡りて實極の

まろめろ

南蠻人沙糖を食ふ
 世に其利大
 病嗽を治



○ 臘 梅

又 南 東 梅

正保年中中々梅より渡り十二月より其花の



臘梅 白から

葉赤く花も赤
 高は四五尺をこへ
 枝葉は刺の

○ 植 桐

いさういさう

延宝年中 薩摩屋次郎より其甚きを畧し
 其根を土果に包みて世に移す



植桐 一名唐桐

葉は大きき五寸にて緋
 花紅色 臭樹の花
 似る 葉状にそ

○秋海棠

寛永年中中興より長崎へ渡る草花記詩譜
秋海棠嬌冶柔軟其同美人捲粧此品喜
陰一見見日色則瘳九月收技上黒子下略



秋海棠 一名新陽花
光一の葉たまたまいふ赤の
紫右よりかゝるくたふ
尺花定月平く日
より色重に

○千日紅

天和年中中興より長崎へ渡る草花記詩譜
色。茎は淡い赤なり寒を畏る人々を雪を消し



千日紅
花葉よあて花形極
ふふり又ふふり調水
好花なり

○東浦塞牽牛花

寛永年中東浦塞より長崎へ渡る葉の腕長
似て七八月紅の花開く根は甚年枯る実をきて植

○朝鮮牽牛花

貞亨年中に渡る八月より花開く朝鮮の似



葉の如く
一名曼陀羅花
はるまひに

○鐵線花

寛文初年中、藤よりくる紫白の二種あり
四月、初年、又紫のあり、蔓草し



鐵線花
葉、菊に似て、満ち
なる葉あり
四月、蔓をばり、根生、外、春、分、極る

○佛桑花

寛文年中、琉球よりくる中、紅、一、又、葉、白の
紅、黄、白の色あり

○普賢草

天正年中、臺國よりくる、林、草、紅、白、二種あり、
實生、も、赤、木、の、茎、枝、より、く、瘡、癰、を、治、す、折、傷、
、腫、腫、にも、より、く、又、赤、木、の、葉、を、み、て、
、禪、の、下、に、置、き、虫、鼠、を、避、く、書、篋、の中、に、置、き、
、生、や、ん、と、く、瘡、癰、を、治、す、赤、木、と、違、く、く、赤、木、
、草、より、く、一、種、より、く、た、と、く、赤、木、の、葉、なり



普賢草
春、苗、を生、き、紅、白、二種あり、
、林、草、に、似、て、赤、木、の、葉、より、
、花、なり

○美人蕉 一名紅蕉

天和年中琉球より来る落日紅よりなり至年
貴門園東へある紅蕉を弄く新しきものなり



本草云花色正紅
如榴花日折一兩
葉下略

○猪手卷

三月に花開白き花を帯と紫色と二種あり花の
形龍鱗に似たり葉は城の葉の葉よりなり二尺
ころけで葉を巻く一葉の葉は未開葉より尺も

○松葉

延宝のころ大坂の信長殿にて希なり一頃年
市よりある二月五月の百端の節に和へありひ
美乃中に入てあるを合は其味淡其にて美なり
本個に有非高者云三四月生苗下略是松葉のなり



松葉

高き五寸の枝より
世を遠く葉は細く
又松葉のなり

○落花生

元禄のころよりある典義便覧に云夜の草に葉
扁豆に似て花開花は一花に就て二葉

を踏みたる所のありて深紅なる味甚る人々甚く愛に

胡鬼子

日炙ふにあり又此種花破本のもる八九人をこぼし夏に花開
子小豆やうしてふく葉つゝとてこのふく葉より
能く日炙は浸るゝ人々甚く愛に
はる終のふく葉ありてこのふく葉より月を照らすはよく

花

白くちり
けふのま
死よのけ



實



箱根草

相列葉根のありて葉の南に七すいて細き葉

葉、根杏より似てらるゝくは根系のあり

産後、血をそるゝと云一年紅毛人々を死

良草ありてを種一清て種く甚く愛に

とこ終る

いさか

葉、
カタチ



伊波奈之

江列三井寺のありて二月に花開く虎耳草
花は似たりんくは花なり二月に花開く
大さ大なる葉、葉のふく葉よりこのふく葉より

中けきふくし皮を去て合味酸甘

○葛蘭草

又張良草

日光玉鬘の頂にある大草一丈余の
莖生のはいて二丈ほある莖葉も
莖五六寸周り葉六七寸四角花の
おつゝ黄色なり古根粗大く根



葛蘭草
夏より秋にかけて
花開く
実ハ菊の如き
してわつらむ

○高野草

高野山大師の御廟ありてせよ一夜目ありて
と云は枯るる草を水に浮かせて他國の人の
なるい草水中に浮て生るる草

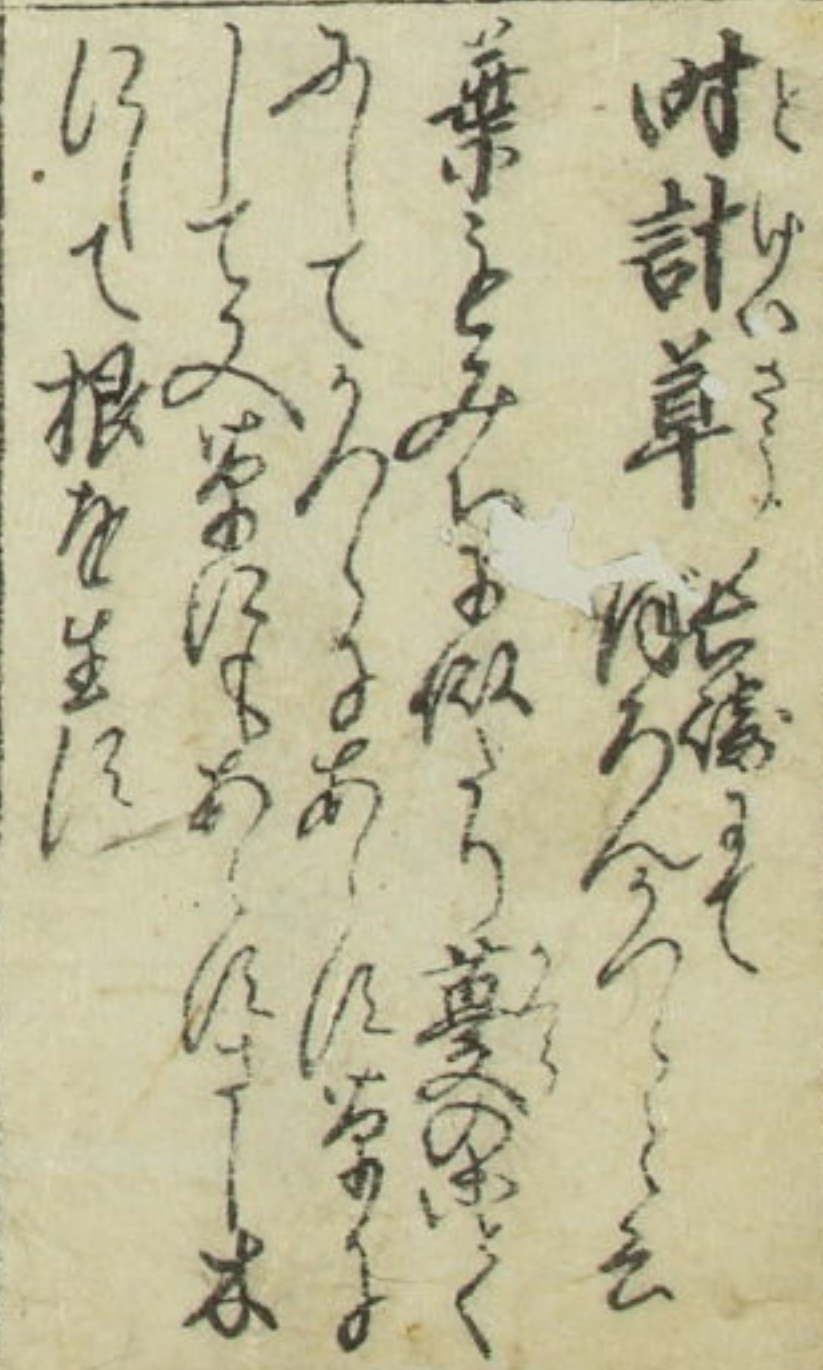


○高野草

高野草の葉のうめたる
状松の葉のうめたる
もの

○時計草

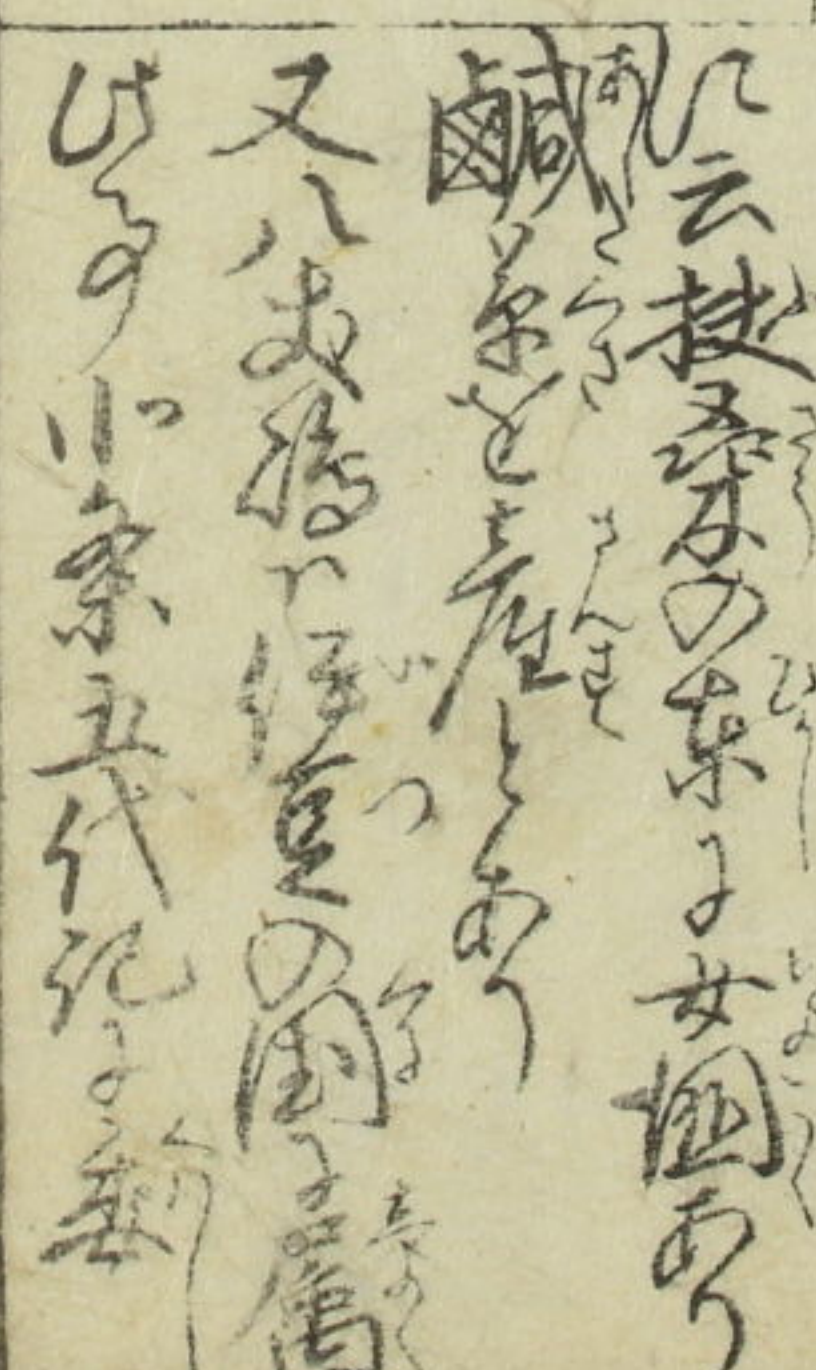
享保の始よりある花五月のけりあり花は
色ありて三重なり葉多く花を澤山咲
一日の中色もけり花形なり



和之

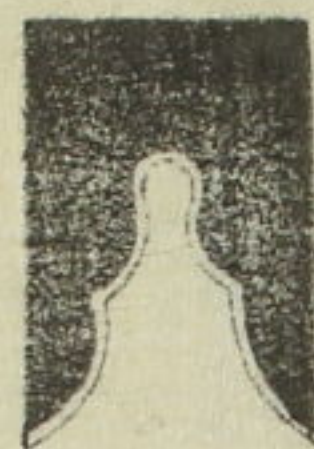
今日種をまかせは明日に生え

ハ丈橋あり日本の諸人根の中々の米と食と是
食は性を疔瘡となる旬芥と葉と二胡と二菜
に今も可憫ハ丈橋は世に云ふ女は後になりと云ふ本に綱を附ける



莖ハ
微紅ナリ
小ナキハ
紅ナリ

器き
用よう



琴

旧事記に天詔琴大己貴命抄ひしありわが
 河海抄より又弓六張をなして唱へたる
 とを抄より是は天細女命天香弓たぐ並に
 一より故事し今歌ふ十二巻の筆と云ふ宇多帝の
 時菟紫麁ひき色子し今舞は曲座人より
 らし一事ありこれ又菟紫琴と云ふ或は十二巻
 二十五巻をとりては略し十二の調子をあり
 初の一巻名のそとよりて深きなり
 寛文の頃菟紫後園善通寺の僧法水といふとの

此年を以ていへば、西暦を算するに、永
徳元年は、西暦の八橋に改二、橋を
檢校城、佐々木、八橋、永徳二年、橋を
二線、より、合に、今、花紫、樂、と、和、と、は、橋、
貞享のころ、永徳、年、十、時、七、十、余、を、換、あ、

○ 三線

永徳、年、中、琉球、より、海、より、の、時、蛇、皮、を、引、張、
或、人、泉、列、環、の、育、人、中、中、海、より、の、時、蛇、皮、を、引、張、
そ、後、虎、沢、に、云、育、人、年、中、蛇、皮、を、引、張、
慶、長、の、源、沢、角、と、育、人、年、中、蛇、皮、を、引、張、
二線、を、引、張、一、小、舟、の、中、の、時、蛇、皮、を、引、張、
其、外、より、い、ふ、と、載、り、年、中、蛇、皮、を、引、張、
そ、後、大、坂、に、か、き、都、城、秀、の、人、年、中、蛇、皮、を、引、張、

そ、う、て、加、賀、郡、に、橋、を、檢、校、と、城、秀、の、人、年、中、蛇、皮、を、引、張、
と、い、ふ、り、あ、時、ハ、橋、流、橋、下、流、と、和、と、は、橋、
五、檢、校、の、御、なり、是、を、二線、と、和、と、は、橋、
そ、う、二、の、字、を、と、と、云、用、口、の、和、と、は、橋、
と、い、ふ、し、目、端、と、い、ふ、と、燈、の、人、年、中、蛇、皮、を、引、張、
お、う、と、い、ふ、の、和、と、は、橋、と、い、ふ、の、時、蛇、皮、を、引、張、
そ、う、一、と、い、ふ、の、和、と、は、橋、と、い、ふ、の、時、蛇、皮、を、引、張、
又、と、い、ふ、の、人、を、和、と、は、橋、と、い、ふ、の、時、蛇、皮、を、引、張、
なり、所、段、の、二、と、い、ふ、の、和、と、は、橋、と、い、ふ、の、時、蛇、皮、を、引、張、
人、と、い、ふ、の、和、と、は、橋、と、い、ふ、の、時、蛇、皮、を、引、張、
紫、苑、若、藤、蘭、の、和、と、は、橋、と、い、ふ、の、時、蛇、皮、を、引、張、
を、い、ひ、て、今、れ、な、め、は、と、い、ふ、し、け、れ、な、め、

入の業をまじひぬを業と云ふ下品の一重な
れものて蓋を中と合せ凡の入ぬをい
ふも今業と云ふ蓋といふこの事あり
なり

○ 勝

中著いじの越後の道風なり
古事記云日本武尊東征の時おぼろ
けの身ま道そのまじひさ
ける時其越後比賣令る
いおれをいふ大を著く
大おれをいふ大を著く
昔破たぬ衣入く出け

よ入て揚る福を十文さう
布あるひと皮ふて結
今の中著い七宝を
をいひを其子と
付王の唐土の
さのこ橋といふ
薨勝は比いて
剛清と云ふもの
○ 風品 敷

元風品の揚る
ありあはれを

○ 樂燒

文祿の順朝四郎より若くはそれを脱いで茶碗に二品
を添えあつてゐる事、樂のみ子を拙しき言ふ要
樂の後あり。時千利は朝鮮の陶造を描き
け体状を製して茶碗をやし。朝鮮の
朝のみ子をとらえて朝四郎と号く又樂のみ子を
そへこれを焼くる。樂後といひて、楽後の
業に加茂入石をあつたれど出来ども是じなほ乃
稀宝なりてける地なる事なり。東照公
との爵ありて今此書をやく

○ 萩焼

毛利輝元高舞の陶造を招きこれを焼く

一の妻をふききりしと云、毛利家長門國秋乃
 城主なり其母もあつて道を教ふてサ結焼
 と稱せし今焼亦の陶工に在りて末流し

乾山燒

後ともに建山けんざんといふありて異ことに

尾秋深省。原係鳴滝。至の土々。燒けむ。流ふ。至。城の乾。子
あけり。も。ん。乾。と。な。る。

深省ハ尾秋光琳の才にて、現在
人詩文和歌を善人

○
釜

管子

三才圖會云と古に鐵釜を「尾をひけり用」とあり
茶釜の「尾」の權子「十」付治工「次郎」と云考す狀
を「きん」尾「きん」尾張蒲固大を「きん」小を「きん」富「きん」形
車軸木の數品を「きん」又菊ある「きん」相の紙
あり「きん」を大岡寺と云て杯頭と

○葦屋金

龍穀寺の里にありてお寺を結木竹板敷の書文
ありて僧雪舟の圖あり舟の備中の人を龍穀寺
遠くへ去るを舟を渡して畫め金の模範なり

○阿弥陀堂秋

秀吉公有馬溫湯に浴し給ふ時千利休從ひり
たりて阿弥陀堂の茶亭を攝ふ大同ありて
來臨あり別れ休茶を點して秋ぞうその時月
なる金の狀を換して新舊を御せ給ふ阿弥陀堂と云

○奈良風品

南都宗善と云ふ老のゆゑあり黒茶の二品あり瓦罌
又知年加羅と云ふ琉球より來るものなり

○埴田炮瀬

河内國埴田村を製せしむ新基菩薩
埴田の陶器のあらうけありて砲瀬を
ひとし今茶器の用あり地味は龍溪の柳川
よりなるものなり

○隠元茶權

相傳ふ隠元禪師。狀をあるも其傳ふ
のあらうものなり。或は隠元湯氣茶權と云ふなり
權子の蓋をさうしてその師の茶權を居て其の
茶の湯氣をひ上の素湯の沸き茶を煮て是
を湯氣茶權と云ふなり。元茶權茶權と云ふ
ものなり。近世茶器出たり茶權のあり

○鐵燈

明徳天皇の頃大坪左衛門尉ある御方あり生國五列強金
只し難賢とて通譯といひ人奔馬神宮を祈り
中し神鏡の曲尺を以て通譯の作らるる神鏡と
と稱し且其方に以てしとて其神鏡を以て馬
痛まじお軍義満公の御方神鏡を以てしとて
其方なる御方大坪流と稱して其方流を以て
此世神作の神を有て作の神作の神と云
倭勢流 倭勢なる負継と云人乗馬の法神鏡乃
妙手大坪流と云一法を以てしとて其方
より負継平負盛十代の高しお軍義満公
はて通譯しその子負継より代々神天なる高し

○馬鐵

大永のころ北条氏康の長子道寺が持せりと
甲陽軍鑑に云く又信長公の時木下重吉より
侍大おの御方一法を以てしとて其方
と云し此世の法なりと云

○鐵炮

弘治元年南蠻人氏中志保智といふ者琉球國
より鳥嘴銃を造る事を教め琉球より薩列
多彌島より年々京師へ入て義連之
勢しその御方を以て而後佐々木義秀に命じて
江列國友村に居住せしめ義秀則ち佐々木
石炭の地をあたふとて石炭の地を以て

かり日本の人彼等が倭の列國を越え清の海を
越え西へとももの所より羅文文集云井上氏正徳は
倭の長一巧を運く奇を呈せ製板あり尋常の
及不あり又朝鮮へ日本より一書あり
朝鮮の柳相國が徵忠録云日本天正十八年
唐宣二月對馬大守より孔雀と鳥銃を運る
吾國鳥銃ありいけ時より始と記し

○大筒

其後外國より大筒を渡せ諸將玉月一書に
ありいけのみに大銃を製せんと書あり
乃被治をせしめありと云ふれども
一に堀の城西より堀を入る道迄あり

あり奉口一尺三寸奉口一尺一寸長一丈五尺一
五尺月の筒を不日漲くすなり日本大銃
乃けりなり堀鏡二見

○鑓

軍用より用する所の鑓は楠正成が作するなり
佐吉合錢の楠正行の書士天野の法作と云ふ
武者板乃長一丈五寸より一丈二寸の平首
よりありいけ時帝の御所より書たり
用する所の室所家の所よりあり古今鑑通云
近に國天九帝倭長と云ふ鑓を作ると云ふ
近文のころの人し大びしも餘ありしと云ふ
やういふものありしと云ふ大銃の板あり

とらんらん三代実源元慶元年茶下子捨一頁半
強捨或餘尾の捨とあり

○管陰

慶長のふに別估和の主大谷刑戸始りて
刑部病ありありてその中へ入るるを以て管陰
を更とて事始云々たふと初始て作とあり
接ふがうと不苗字未だにさしてあて果あたる
へともうとふよりて足ぬ刑戸の始り
自由なるさるるよりて刑戸を始りたる所とあり
中へくは一人なり

○割符

作の長六寸にて二ツ子割て是を合符と云ふ

よきとよきと符と云漢武帝作使符を作し
郡國ちよあふ半合て太い京師とあり
郡ちよあふとてこれ割符の所あり

○合羽 桐油

合羽の中ちのものし上ちの義を用ひ軍用より義
合義第一といふより義を細く具し合羽の元丸合羽
を作る人の義を其中ちのあつを合せるとあり
国々合羽と云ふ

○桐油

桐子油桐と云ふありとあるは其の油とて製し
今在の油を用ひとて桐油のあつ奉幸に云
桐子油とて小く長ざる事一其子を受て

油に在の油もぬり又云は油を以物を塗る
五色を製と白色の漆のあなるしは油を塗る
よりさして用相油漆と云又松脂を和て紅
とをぬるしを漏さるるなり知也年塗と云

○万年葛籠 并紅紙

え縁のうゝ神田襦那はくら甚き清といふもの
うゝあてふとをゆるは老え人肌をなう濃子細う
るやぐもて経糸を中入漲るるし又紅紙もはる
ぬらし其のふくふくを

○枕箱

信長公の時よりぬるふむしは枕箱と作を
衣れを襦あも用ひ枕箱のうらなうを襦あも又

對枕箱にて作列するは其のふくふくを
はめてはるるを

○傘

天正のころ牌の商人納金助と云ふ小琉球
より品寄るなり文禄三年に本朝へはる一時
茶壺五十箇傘蠟燭各千挺活唐香の歌二丁を
秀吉公へ獻じ數千金を賜ふる傘の濃紙は日本
よりゆき武書平宗盛傘のふくふくは是不需

○蠟燭

文禄年中すて日本に蠟燭を
下のらるるに倣てふを製し蠟を採るは
五種あり漆樹荏桐椿タネ木烏白木

女貞のまうも老と事なりあり殖列府志云
 黄白の蚕蚕の皮は凝滓とをみて蠶と云
 唐らうと云ふ一箇をみるんか
 清のあまのし草那の草を考へて
 上品なりびー軍用にも
 常なる也も用びる事
 びーの終り大毎日のや
 ねる人松明を掛る今を
 又不利の事ありと有
 仰願寺蠟燭 世俗誤て
 江戸山谷の仰願寺の
 弘明念佛を修せし
 弘明念佛を修せし

らうの大きぬへう
 ちりて細くを
 招佛堂のらう
 〇 燈 杖
 燈の明なるを
 明なるの
 ハ九十の老人
 により燈の杖
 燈の杖を指して
 〇 紙 捻
 又髪捻トキ
 中より云ふの
 うろろえ結と

老人ハ痰せぬ
 漢記儀志曰仲秋月
 杖の始
 又云唾の咽
 又云常
 紙をひ
 髪を
 紙を

てあつた髪を洗ひし又髪を洗ふの長く用ひ
平元猶も紙をすこらるはらて巻く丁し
日本紀云天武天皇詔曰自今以後男女悉結髪

○ 摺元結

実文のあらう紙を摺をぬく摺て水より一車
より紙をすく水を摺ゆるを摺元結し又七
文結と云ふなり紙のふしを摺て紙ある紙を
い紙とて製する紙上品なり

○ 伽羅油

正保のころ本室所製之久吉素けむる後
三條の市宇賀健のふしを製するを製伽羅油
其のふしを製するを製伽羅油なり其のふし

胡の油の白檀丁子等以浸し白じ油と稱
ちる髪をすくふ及年をすくふ又髪をすく
髪をすくふは通ふなりその油は産地ある
事とせし頃年漆のふしを製するを製伽羅
油なり

○ 白粉

持統天皇六年の始に紅粉を洗ふと云ふれと
粉を洗ふは度長元和のころ京列課後
京年と云ふの大明のころ智のけりて道又小西粉
は課の某粉を小西法を清高粉津守と云ふる入る
得るふの法し小西粉を大目には萬ふつて近世を
乃白粉甚佳なりと云ふて異國人をを買去

○揚枝

或人の云揚枝、追世の製なりと云ふ所の説ありん
るに、追代の物あり、古来の物あり。

つとめて、竹をとりて、その節を削り、その節の
上より、又天竺の
佛にせしめ、あり、揚枝、淨水と云ふ經文
あり、又、蓮花を、蓮と、經あり、揚枝の
なり、唐のいふ事、中經に、永平寺の五祖
道元禪師、入室、揚枝をつひ、天臺の
如淨禪師、甚感、られり、と云ふ事あり、
今、中經に、をへり、元を、始
と云ふ、至本、明の矩、換なり、と云ふ也。

○水引

此、昨、城、殿、に、これ、を、製、に、紙、拾、を、水、に、浸、し、て、
中、を、絞、り、絞、り、し、て、又、絞、り、し、て、
元、外、連、歌、の、懷、紙、を、綴、り、具、し、連、歌、の、風、に、
元、と、云、ふ、紙、拾、を、紅、青、黄、の、粉、を、用、ひ、て、
ぬ、り、し、て、細、く、糸、の、束、の、ち、り、を、て、
乃、其、の、束、を、ま、れ、て、水、に、浸、し、て、
糸、を、引、て、糸、の、ち、り、を、糸、の、束、に、
糸、を、引、て、糸、の、ち、り、を、糸、の、束、に、

○南方鏡

尾、外、の、後、屋、の、度、し、
孔明、出、陣、の、表、に、深、く、不、毛、を、入、

今南方已定甲兵無事のくく 法女細松乃
子ありくくこのくく 子ありくくくくくく
くぬけるも黄とく

○常香盤

近世製く 東方の香を作る者多しとく
衣に吉改を云信く 道衣を上りて 圓西の法別
圓八列の寺院より 吉改を造るを 衆人信ふ
如く 衆所より 後心院より 住と祖父より
信く 三代此を信るを 産く 三代目大信
を 庚戌年より 子二人ありとく 子より 業と
ありて 薩屋丸屋より 茶屋とく 今
は 衆を作る者多しとく 皆信なるのみ

○烟管

多きこの後く 時節の紙を巻て たを 紙のこ
くく 紙のこく 細き竹を くるくく 紙のこ
たを 巻て 紙のこく 羅の文集云 佗波古
草名採之 乾暴刺其葉而貼于紙 捲之吹火
吸其烟 下畧 紙のこく 紙のこく 紙のこく
事なり 元和元年六月廿八日 天下統一 統一
古き信あり くるくく 白木屋より 衆人信
の 封疆を くるくく 食の蔬の くるくく 紙のこく
部を くるくく 紙のこく 紙のこく 紙のこく
信より くるくく 紙のこく 紙のこく 紙のこく
ぬむ くるくく 紙のこく 紙のこく 紙のこく
紙のこく 紙のこく 紙のこく 紙のこく 紙のこく

玉をとりここずりあひあのた本ほん香かう東とうあめをきかきこんあ
又玉たま帯おびい著めどと云い帯おびしをを杉すぎよ加くて袖そで子の目め撃うちうる
室むろをさく夜よひの具ぐなれどもいぬぬと云いと云いめといみとてはな
にいふはなのちうり

○雪踏

千利休^{せんりきゅう}也^や東^{あづま}を^を作^{つく}り^しむ^も雪^{ゆき}中^{なかに}の^の落^{おち}次^{つぎ}に^に湿^{しづ}る^る
 魚^{うしほ}を^をい^いそ^そ革^{かわ}履^{はき}も^も又^{また}そ^そう^うを^をか^かく^く祢^ね山^{さん}を^を裏^{うら}付^け
 そ^そう^うと^とし^して^て於^お湿^{しづ}の^の魚^{うしほ}ぬ^ぬる^るを^をさ^さう^うて^て裏^{うら}に^に
 牛^{ぎう}皮^{くひ}を^をい^い作^{つく}る^る雪^{ゆき}の^の人^{ひと}を^を濡^ぬれ^れと^とし^して^て不^ふ理^りと^とし^して^て高^{たか}踏^{ふみ}
 と^と無^な解^{かい}ら^ら今^{いま}常^{じょう}に^に常^{じょう}道^{どう}を^を用^{もち}ひ^ひ

○ 千石せんごく 從しん

貞亨のころ、東武門通、江戸屋敷を隔てゝ、その
工事を一はしめてこれを造る。

○ 藥 物

相傳の轅山風の時に始る乗物ハ輿ハ略シス外俗
 所傳車ト云ふもの車を深き座形と云ひて
 輿ト云ひて四角高苑云輿車無輪也輿の下の
 二の轅を深き上の一の轅を用ひて駕と名付高貴
 人の家より輿よりハツクものよりハツクものハ
 然レシ駕のなハ車駕と云ふて車の座形の事
 古史考曰黃帝作車少昊時如牛禹時奚仲
 云人加馬けるを知らずと云

○竹馬

竹^{たけ}竿^{かん}は便^{べん}輿^いより劣^{くわ}るものし今^{いま}能^{のう}役^{やく}者^{しや}の末^{すえ}あへぬ
とらふに便^{べん}輿^いのみ事^{こと}し竹^{たけ}竿^{かん}もあをいと汚^{よご}しに便^{べん}輿^い

元軍用の具し、子負がふは、
 嗣信を復讐せしめ、軍用の
 あたし異し、竹を曲し、
 三才圖會云、復讐即監興而賤民常用之竹也

○大八車

寛文年中、中江、
 今大八と書、その頃、
 して、
 びと、

○猪牙舟

明暦のころ、
 もの、

く、
 く、
 近年猪牙の二字を、

○江戸辻駕

元禄の末、
 ぶき者、

○唐弓

明暦年中、
 の人、
 二十斤、
 何よ、

○賀留部

阿蒙泥人常を玩ぶ寛永のころ長崎港に人
 物多く載せり凡四品十二挺は四種の紋あり一は
 仔細に云南蛮人秘を仔細波多し云りよめては
 秘の状を畫く又波字と云青色を波字と云
 は細書と云を心彩子又古津不と云酒盃をハ
 古津不と云し酒盃の形を表し又波字留と云
 おと玉を稱して波字留と云し別々の状あり
 光十法師の形を畫し僧形を表し光十一は
 馬の人を畫く士を表し光十二は馬座の人を畫く
 ハ庶人を表し光十三は又加字半須半と云
 ありと云て南蛮國の記なり

二之卷軸

全五冊

高橋復典

